



営農NEWS



梅雨明けが遅延しています。長雨、日照不足による水稻の穂いもちや紋枯病などの発生に十分注意してください。

今年の梅雨は、茨城県でも梅雨入り後から曇りや雨の日が多く、日照時間が少ないか無い日が続いています。関東地方の梅雨明けの平年値は7月21日頃（昨年7月24日頃）ですが、まだ予報では雨の日が続くと予測されています。

県病害虫防除所の水稲巡回調査では、7月上旬現在、葉いもちの発病度および発生地点率ともに平年並ですが、県予察圃（水戸市）の発病度が平年より高く、葉いもちの感染好適条件を判定するBLASTAMによる7月の出現日数が平年より多く、特に県北地域で連続して多かったこと、さらに気象予報で向こう1か月の降水量が平年並または多く、日照時間が平年より少ないと予測され、発生を助長する条件であることから

令和2年7月17日付で「病害虫速報 No.4」 県内の広範囲で葉いもちの感染好適条件の出現がやや多い状況です。今後のいもち病の発生に注意し、適期防除に努めて下さい を発表しました

このため、現在、出穂期に入っている「あきたこまち」やこれから出穂期に入る「コシヒカリ」などでは、いもち病（特に穂首いもち、枝梗いもち、籾いもちなど）の発病に十分注意し、必要に応じた防除対策に努めてください。

また、紋枯病も現在、下位葉鞘に発病している圃場において、**今後は上位葉鞘への発病進展が懸念されますので、圃場をよく観察し、発病が確認されたら早めの防除に努めて下さい。**

1 いもち病

穂首いもちは、出穂直後から10～15日後くらいまでに感染すると被害が大きくなります。その後20～25日目くらいまでは収量に影響する被害が発生する恐れがあり、枝梗いもちや籾いもちでは、さらに感染期間が長くなります。

穂いもちの主な伝染源は葉いもちの病斑で、**止葉以下3葉目までに病斑がある場合には、特に注意が必要**です。

葉いもちが発生している圃場では、**出穂期前に予め粒剤等を本田に散布**（薬剤により効果発現までの期間が異なりますので、使用時期を確認）して、発病を長期に防除する必要があります。

表1 水稻 穂いもちの主な防除薬剤 (令和2年7月21日現在)

薬剤名	希釈倍数または施用量	使用時期 / 使用回数	分類
コラトップジャンボP	小包装(パック) 10～13個(500～650g) / 10a 投入	出穂30日前～5日前まで / 2回以内	16.1
ゴウケツパック	小包装(パック) 10個(450g) / 10a 投入	出穂5日前(収穫30日前)まで / 1回	16.3
キタジnP粒剤	3～5kg / 10a	出穂7～20日前 / 2回以内	6
アミスターエイト	1,000～1,500倍	収穫14日前まで / 3回以内	11
トライフロアブル	1,000倍	収穫14日前まで / 2回以内	U16
ノンプラスフロアブル	1,000倍	収穫7日前まで / 2回以内	U14と16.1
ブラシフロアブル	1,000倍	収穫7日前まで / 2回以内	U14と16.1

表1、2とも 注1) 無人航空機または少量散布専用ノズルを装着した乗用型散布機を用いる場合は、それぞれの農薬使用基準を遵守してください。

注2) パックや粒剤は、水田が水深3cm以上で均一に散布し、3～4日は湛水状態を保ち、散布後一週間は落水、かけ流しを避けてください。

注3) 分類欄には、FRACコードを記載しました。同一分類(コード)は作用点が同じなので、連用は避けてください。

2 紋枯病

防除時期は幼穂形成期～乳熟期にかけてですが、**発病後の早期に防除の方が効果的**です。また、発病圃場では**出穂後に発病好適条件が続けば上位に進展**しますので、**追加防除が必要**になります。発病斑は水際に近い下位葉鞘から発現し、次第に上位葉鞘に進展するため、薬剤散布は下位葉鞘にまでかかるよう丁寧に行います。**前年に発病がみられた圃場では発病しやすい傾向があるため、特に注意して発病の確認と早期の防除を徹底**します。なお、薬剤を散布する場合は、**収穫前日数に注意し**、また、周辺の早生品種などに飛散しないよう十分注意してください。

表2 水稻生育中の紋枯病の主な防除薬剤 (令和2年7月21日現在)

薬剤名	希釈倍数	使用時期 / 使用回数	分類
モンカットフロアブル	1,000～1,500倍	収穫14日前まで / 3回以内	7
モンセレンフロアブル	1,500倍	収穫21日前まで / 4回以内	20
バリダシン液剤5	1,000倍	収穫14日前まで / 5回以内	U18
リンバー粒剤	3～4kg / 10a	収穫30日前まで / 2回以内	7
キタジnP粒剤	3～5kg / 10a	出穂7～20日前 / 2回以内	6

注1) リンバー粒剤は出穂期までの散布が効果的で、病斑が地際から20cm位の所にまである場合に散布し、発病前の早い時期やかなり上位まで病斑が進んだ場合は散布を控えます。また、キタジnP粒剤も、多発生時には効果が劣ることがあります。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040